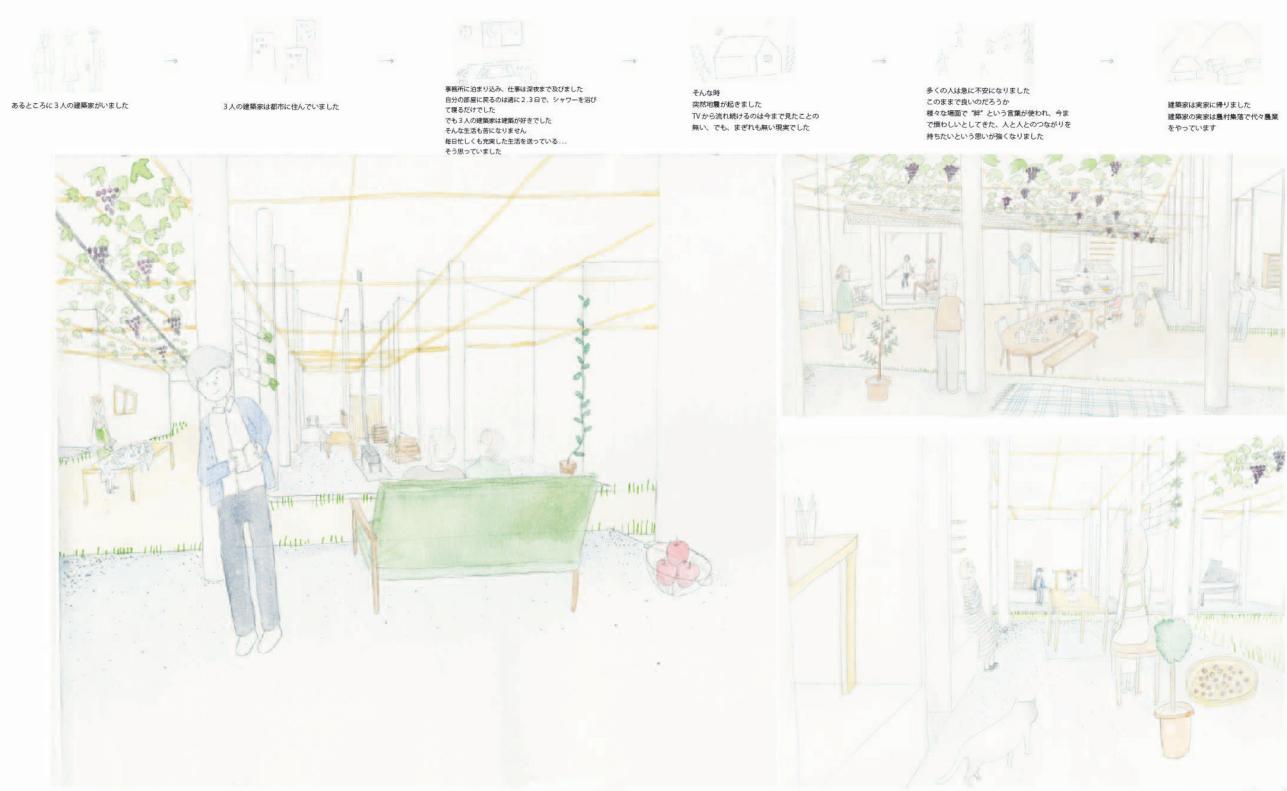


この家の物語

震災後の人々の暮らしについて考えた

高校生まで自分とて当たり前だった暮と共にある生活が
そこを離れてちょっとだけ大人になった自分の目に
不意に、魅力的に映りだした

この家の物語



帰って、朝っている柴犬の散歩をしている時、
町に1つしか無いスーパーに買い物に行く時、
町内の温泉に行く時、
色々なところで知り合いに会い「帰ってきてるんだね」

建築家は気がつきました
ここには都市に住んでいる人々が無くしてしまったものがある
それは農業が人々をつなぎとめることで存在している

- 黒澤は決して1人では出来ません
田嶋さん(範川)は一大イベント
複雑化したところはいよいよ、業務拡張の仕事で大家ではありますが専門で田んぼで畠やおやつを楽しめであります
時期になると田舎ではその問題でちまきりです
黒澤の生活は自然と田舎です
家族の生活は自然と田舎です
汗を流して自らたちや多くの人々の生きていける種を生み出す企業です

建築家は決心しました
自分も農村で農家をやりながら仲間を

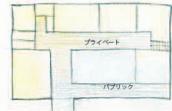
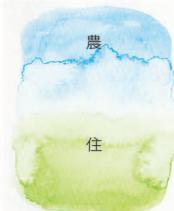
そこで建築家が1人、2人の友達を呼んで家を建

□site



小布施の農 × 家

小布施には自分の家の庭を解放して、外部の人に対するオープンガーデンという制度がある。その延長で農家の住宅は都市部での住宅よりもずっとパブリックに開かれていている。それは、農という農業が家の中に入り込んでいることが大きい。家は情報交換の場であり、作業場の一部で都市部で言うカフェやオフィスの機能を持っている。

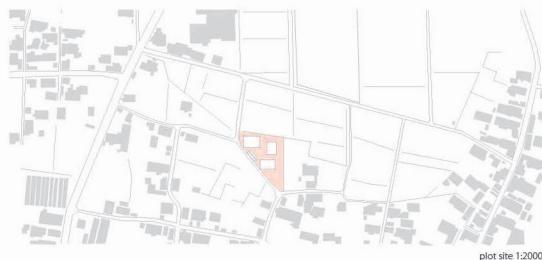
一般的な住宅の構成
玄関、廊下はパブリックな住まいをもち、外の人気が入ってくる。

敷地南側より

対象敷地 長野県上高井郡小布施町住1088

敷地は小布施のなかでも農家が多くりんご畠やぶどう畠がある農村地域であり、北側の延徳田んばと民家がある地域との境目に位置している。

敷地南側と東側には民家があり、北側は農地で西側も車1台が通れるほどの幅員の道路を挟んで野菜や果樹畠が広がっている。また西側には長野県北信地方の長野盆地の代表的な5つの山である剣山、斑尾山、黒姫山、戸隠山、船岡山の北信五岳を望むことが出来る。



□信州小布施

小布施は面積3.4km²以内にほとんどの農業が入る長野県で最も面積の小さな町である。その小さな町に年間120万人の観光客が訪れる。それは整備された観光地の縮みだけではなく「農業と文化」をまちづくりの鍵として、中心部から農村部まで継ぐ景観のグランジションも大きな魅力になっている。そして、農業は大陸気候で寒さの度が激しく、最高気温は35°C、最低気温は-15°Cまで下がる。この特有の気候条件と自然の離れた耕作土壌により稲穀の栽培に適している。りんごやぶどうなどが多く栽培されている。



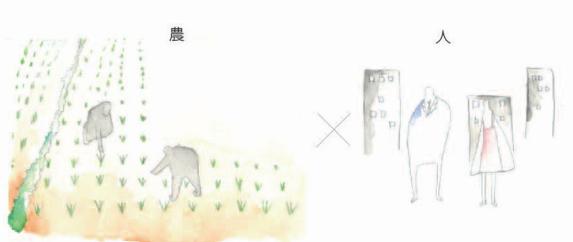
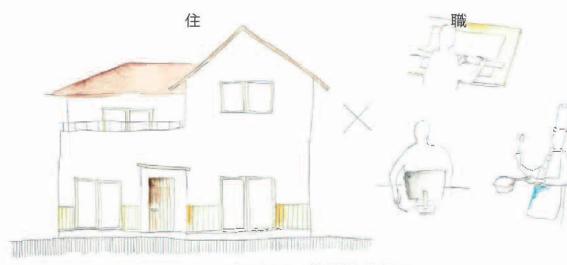
小布施の農村景観

□現在の問題

農業の市街化
TPP開通などでもありますかとなっていつよう
に日本での農業の重要性が失わつつある。農業の減少
農家人口は昭和50年を境に減り続けてい
る。ハウスメーカーの新規住宅街
小布施出身の若いたちはリターンで戻つ
てきてどこの郊外の風景とも変わらない
住宅に住んでいる。農業の空洞化
小布施の中でも新しい住宅は市街化区域に
建っていて、反対の農村地域の人口は減り
続いている。農業の高齢化
現在の小布施町の農家の3割しか後継者の
めどがたっていない。小布施の人口減少
全国的な問題ながら小布施も例外ではなく、
町としては新規就農者を支援することで小
布施に住んでもらうプロジェクトを行って
いる。

□program

「様々な職業の人が地方で農業をしながら暮らす集住の提案」



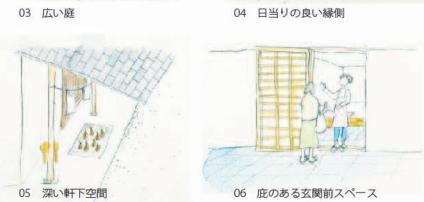
田園住宅のプロトタイプ

現在の住宅は都市住宅と郊外住宅の2つしかない。そのためどの地域へ行っても同じような風景が広がっており、郊外住宅では農作業スペースや広場が無いため農業をやるのは困難である。ここに新たに現代の農村地域での住宅のかたちとして田園住宅を提案する。



農家住宅の特徴

- 01 農作業のピロティ空間
- 02 軽トラで入れる物置
- 03 広い庭
- 04 日当りの良い縁側
- 05 深い軒下空間
- 06 庄のある玄関前スペース



□農半農の暮らし

農業は季節によって忙しさが変わり、天候によっても作業が大きく左右される。また金銭的な理由から兼業農家が多いが、兼業する仕事が今地方にある仕事だけではなく、都市でやっている仕事を持つていて、SOHOのような仕事をしていきたい人はインターネットが普及した今、都市と地方と環境の違いは少なくなっている。



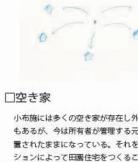
職住近接のこと

昔は今のように住宅街とオフィスのように家と職が離れているのではなく、町屋や農村でも家にもっと仕事が入り込んでいた。仕事という社会との接点があることで家はよりまことに開かれていく小さな暖かい、大きな離が生まれる。



□まちへの広がり

いろいろな農業の仕事の人たちがまちにでいで、その動作をまことに描いていく。料理部においでの料理教室を開いていたり、作曲部はミニコンピューターを操作する。なんでもない田舎に都会の施設された面が吹き込む。



□空き家

小布施には多くの空き家が存在している。そのため所有者が需要する人が無く放棄されていることが多い。それをリノベーションによって空き家をつくることができ。



□既存住宅

農村地域の既存住宅は木造で老夫婦2人しか住んでいないなど、その需要を活用出来ないことに建築家が介入していく。

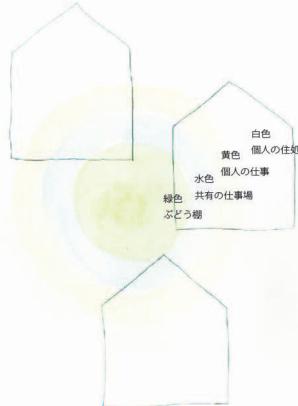
01 農半農の暮らし

02 職住近接のこと

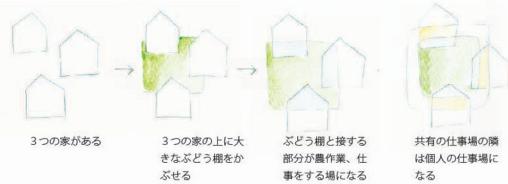
03 空き家

04 既存住宅

□form



形態 diagram



3つの家がある

3つの家の上に大きなぶどう棚をかける

ぶどう棚と接する部分が農作業、仕事をする場になる



共有の仕事場の隅は個人の仕事場になる

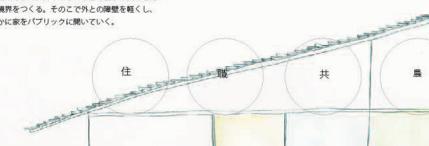
3人の建築家の役割

境界をセルフビルド

建築家は「住」「職」「農」の4つの空間の境界をつくっていく。境界は家ごとに決まり、また季節によっても変化していく。現在の壁やガラスのような完全に空気や音隔離を分けるてしまう方法ではなく、薪や干し物などの農業の要素を用いて緩やかなつながりを持たせた境界をつくる。そこで外との壁を軽くし、プライベートから開拓を経て様々なに家をパブリックに開いていく。

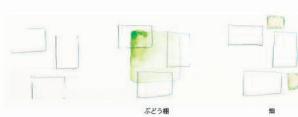
住 職 共 農

中央のぶどう棚は家のなかまで延び、家では空間を分ける境界をつくる



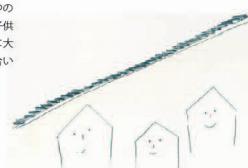
□2つの畑とぶどう棚

隣の家と畠とつながり、3つの家はぶどう棚でつながる



□1つ屋根の下

個々の家は1つの片流れの屋根にし、その下に3つの家族が暮らしている。子供もお年寄りも昔のように大家族で家族同然の付き合いが生まれる。



□暮らす場所を移動

ここに住んでいる人は季節によって住む場所を変えれる。夏は気持ちのいいぶどう棚の下が食卓で、冬は暖かい薪ストーブの側が一番の寝床となる。



この家の住人



建築家
建築家 28歳女

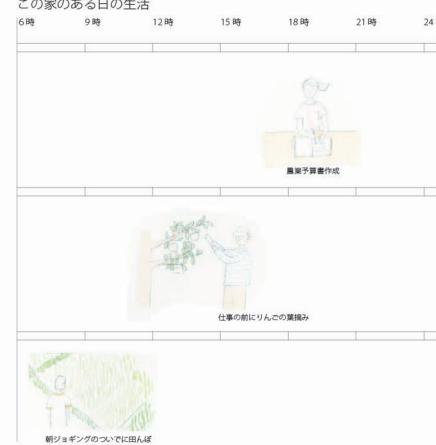


画家
画家 46歳男
42歳女
16歳男
14歳女



登山家
登山家 38歳男
37歳女
12歳男

この家のある日の生活



まちへのつながり



この家の境界





三重大学工学部建築学科 2013 年度建築企画設計優秀作品
「農のアトリエ」小林 しほり

